

国文学研究資料館報

第42号

平成6年3月

楨の樹の蔭で

本田 康雄

国文学研究資料館の正門を入るとすぐ左側に亭々と茂る楨の樹が並び立っている。すがすがしい常緑の姿は四季を通じて変ることがないが、春——年度末という言い方が公務員には相応しいか——ともなれば今年もまた地味にさりげなく色艶が増すようである。かつて肥後熊本藩主細川家の拝領屋敷であったこの風致地区にこの機関が設立されてから数えて二十三年間、多くの先輩が研究と業務に精進され成果を挙げて去って行かれた。すでに鬼籍に入った方、OBとして館外にあつて御後援して戴いている方々のことを想う。私もまた畏友新井栄蔵教授（研究情報部長）と共に停年を迎え、この地を去ることになった。新井さんは

いささか健康を害しておられるのととりあえず私が代表して退官の御挨拶に代えて二十二年間の夢物語、よしなきことを書き綴ることになった。いずれ健康を回復されてから新井さんも筆をとられることと思う。

中央よりも地方を

多くの方々にお世話になった。とりわけて資料館の業務の中心である国文学古典籍の調査とマイクロフィルム撮影について各地の図書館・文庫、社寺、の所蔵者、また地元の方々の御協力を得た。国文学界は地方の組織に強く、各地の県や市に地元の国文学者の学会、研究会があつて、資料館の仕事の後援して下さった。秋の講演

次	頁
楨の樹の蔭で 本田康雄	1
国際日本文学研究集会	3
文庫紹介①「正教蔵文庫」	3
共同研究報告	4
小川増彦・佐伯真一・山崎誠 北村啓子・新藤園三・武井徳三	7
衆報	7
新収資料紹介①	8
新収和古書抄 平成五年	9
国文学研究資料館 案内図	10
利用者へのお知らせ	11
平成六年度春季学会開催一覽	12

会は毎年、東京以外の地で開催し、すでに十三回に及ぶ。京都にはじまり福岡、仙台、名古屋、金沢、愛媛、鳥根、熊本、札幌、大阪、山形、広島と廻つて昨年再び京都で開催された。その都度、会場の設営や連絡、宣伝など各地の国文学者のお世話になった。その個々の方の御好意に感謝すると同時に、各地の国文学者の学会等の組織が根付いていることを有難いと思つたことであつた。私はかつて文部省初等中等教育局に勤務し、教科書関係の仕事で各地の小、中、高校に出張した経験がある。その時、県・市の教育委員会の組織、全国にはりめぐらされた教育行政のネットワークの広さと細かさに驚いたことであつた。これは行政の組織であるが、学術研究のための各地の国文学者の組織も全国に限なく結成されている。その中核は大学、短大勤務の研究者であろうが、郷土史家や図書館・文庫の職員、地元

元の新聞の雑報記者も参加し、その背景には小、中、高の国語教育に関係される多くの先生方がおられる。この様な学術研究のための集まりが全国津々浦々に拡がり資料館の事業を後援して下さっているのだ。御後援戴いた各地の国文学者の方々への感謝、とそれに重ねて私は郷里の熊本、また長い間お世話になった金沢の国文学者諸兄弟への御挨拶をここに記させて戴きたい。学術、文化というとかく中央の都会の学者、文化人の活動が目ざされがちであるが、それはジャーナリズムや出版社の宣伝の上だけのこと、真の学問においては各地の県、市、町、村での研究活動が中央の政府の役人や都市の学者に從属する必要は全くない。江戸時代からの文化を継承する地方の生活に根ざした学術文化活動が重要である。都会をさまよふ根無草の学者だけに注目する弊風を改めたいものである。かつて

西欧諸国に追いつこうとひた走りに走った後進国コムプレックスからまだ脱却しきれないのではなからうか。

他者に学ぶ

資料館の活動においては、国文学界、国文学者が中心であるのかも知れないが、図書館界、情報処理学界といった他者―異文化、別世界―との交流が必須であった。古い国文学者の体質ではコムピュータは勿論、マイクロフィルム一巻の扱い、その整理利用の方法さえ分からない。また国文学研究そのものについても文壇や図書館界、そのほか国文学界以外の世界に多くのすぐれた国文学研究者、愛好家が存在する。所謂（職業）国文学者だけが国文学を研究している訳ではない。一種の新しい図書館でもある資料館の仕事に従事して、私はすぐれた他者との出会いを実感することがしばしばであった。他者を理解した者がはじめて自らを位置づけることが出来るのである。独り善がりはやめよう。秋に開催される国際日本文学研究会集合同時に、国文学者のより抱擁力

のある体質を形成するための催しと受けとめている。若い外国人研究者の広い視野と自由な発想は魅力的だ。他者との交流の中で国文学者の体質を改善してゆくことも国文学研究資料館設立の大きな副産物だったのではなからうか。

日本・日本人像

資料館には外国人研究員（客員教授）の制度があつて著名な日本学研究者が滞在される。その最初の研究員はドナルド・キーン教授であつた。私は整理閲覧部に所属していたので、資料を利用されるこの先生に接する機会が多かつた。まことに幸運な役得であつた。

先生はいつもにこやかに、ついちよっとしたお話が素晴らしく魅力的で心に残つた。ただ一度だけ私は先生が激しいいきどおりを感じられた場面に遭遇したことがあつた。それは資料館への出勤の途次たまたま御一緒になった地下鉄の中で起つた。ラッシュ直後で、乗客はまばらで二三の空席がみられた。お話をうかがっているうちに、先生は何故かいらいらした様子で車輛の棚のあちこちを見廻し始められた。棚の上には乗客が棄てた

新聞や週刊誌が散乱し、バラ／＼になつた色刷りの新聞紙がめくれば返つて床いっぱいになり、乱れた情景である。確かに散らかつて汚いが、しかしこのコースを多年

――停年まで――通勤する私としてはこれは日常茶飯事の風景で何の感じるところもない。この地下鉄の棚の汚なさ、それに多分、その汚なさに慣れきつている私をふくめた乗客の無関心がいけなかつたのだ。先生の心を傷つけたのである。激しい怒りの表情で先生は床の新聞紙を全部、御自身で拾つて廻らんばかりの気配をみせられた。「本田さん、ニューヨークの地下鉄はいくら汚れてもいいんです。日本はきれいでなくてはいけません。これは困ります。」と仰言つた先生のこの時の興奮ぶりを私は忘れることが出来ない。隅々まで掃き清められた日本の町や村、清浄な神社、仏閣の境内、手を洗い、口を漱いで合掌する日本人の姿を先生はイメーヂされておられる。極東の愛すべき国、日本の文学を世界に紹介することを天職と考えておられる先生の日本文学研究の原点にこの清浄な日本、日本人像があつたのだ。私は騒々しい

生活の中ですっかり風化してしまつた私の日本人の心をかえりみて反省したことであつた。

以上、館外向けの御挨拶が主となつた。勿論、館内の教職員の方々への感謝を忘れてはならない。無事に停年を迎えられたのは、一重に皆さんのお蔭である。

この国文学研究資料館には文部教官三種類（国文学者、国史学者、情報処理学者）、文部事務官二種類（庶務会計の事務官、司書職の事務官）の教職員が勤務している。昭和一行生まれの私の昔の言葉で駄洒落を言えば「五族協和」、近年は「多国籍企業」というのが流行している。事ほど左様にそれぞれ専門、職種によって価値観が異なるのである。どうぞ仲好くやつてほしい。今は連合の時代である。他者の存在がお互いにプラスに働く様であれば旧地主の細川様も慶びになるであろう。

太平洋戦争敗戦後、五十年経つた。私はまことに有難い平和の時代を江戸文芸を読んで過すことが出来た。戦後、民主化の動きの中で新たに日本の各地で結成された二十有余の各種の国文学会の悲願

がかなえられてこの国文学研究資料館の設立となった。人も人の組織もそれぞれの歴史を背負って前進するものである。歴史から遊離した一時の思いつきはどれ程立派な考えであつても実現しない。実

第十七回国際日本文学研究集会

平成五年十一月十一日(木)と十二日(金)に、第十七回国際日本文学研究集会が開催された。研究発表と公開講演は、次のごとくである。

【研究発表】

○頂青氏(神戸大学大学院) 浦島説話と「柳毅伝」一両作品の文学表現と神仙道教思想の受容について
○ニールス・ギユルベルク氏(ミュンヘン大学講師) 中世文学に於ける講式の意義 ○小島環穂氏(琉球大学教授) 雪のサンタマリアーキリシタン文学としての「天地始まりの事」の比較文学的展望
○王建康氏(復旦大学講師) 近世怪異説話における隠里、仙人と中国道教 ○スウワツタナー・オンシリ氏(東京学芸大学大学院) 羽衣説話の変容の研究―草双紙・タイ国仏教説話を中心に― ○李

現しても短命に終る。先輩の国文学者の活動の長い歴史を受継いで国文学研究資料館がこの楨の大樹のように素朴で逞しくいつまでも色鮮やかに栄えることを祈りたいと思う。

樹果氏(南開大学教授) 馬琴の水

澁観 ○曾秋桂氏(屏東技術学院助教授) 「雲」に託す鷗外と漱石の思い―「青年」と「三四郎」との比較を通して― ○青山友子氏(クイーンズランド大学講師) デイレットタント考―木下左太郎の場合を中心に― ○申銀珠氏(お茶の水女子大学大学院) 八朝鮮Vから見た中野重治―植民地知識人の自画像を求めて― ○湯沼潤氏(ペンシルバニア州立大学大学院) 三島由紀夫の「墓上」を解説する

【公開講演】

○バーバラ・ルーシュ氏(コロンビア大学教授) 国文学研究資料館客員教授 女性の出家と古典文学―日本と西洋― ○宮次男氏(実践女子大学教授) 文学と絵画の出会い―中世絵画にみる文芸性―

文庫紹介⑱

大津市坂本西教寺 正教蔵文庫

天台真盛宗総本山、戒光山兼法勝西教寺は、聖徳太子の創建と伝え、平安時代に元三大師や恵心僧都が入り、鎌倉時代には恵鎮の大乗円頓戒復興の舞台となり、文明年間に真盛上人によって不断念仏の道場として再興された。信長の比叡山焼打後、明智光秀の手で再建され、光秀一族の墓があることでも有名である。ここに、叡山文庫真如蔵・日光天海蔵と並ぶ天台聖教の蔵書・正教蔵がある。これは、明治一二年に比叡山西塔北谷の正教坊住持稲岡堯如により寄進されたものである。その典籍の大多数には「芦浦観音寺舜興蔵」と記されている。その事情を概述すると次のようなものとなる。

比叡山焼打時、正教坊住持の詮舜は、兄賢珍を頼り琵琶湖東岸の芦浦観音寺に難を逃れた。詮舜は後に兄の後を継ぎ観音寺住持となり、施薬院全宗・正覚院豪盛と共に叡山復興に奔走した。一方、正教坊は詮舜の法弟、豪運が継いだ。その豪運の法資で、詮舜の遠縁にあたるのが舜興である。舜興は、初め朝運と名乗り、元和二年に正

教坊を継ぎ、寛永一一年には観音寺に移り、寛文二年に同寺で没した(七〇歳)。正教蔵には、西教寺や正教坊の伝来本、またその他の蔵と思われるものの混入例も若干見出される。しかし、大半は舜興の観音寺在住中に書写・収集されたもので、正教坊朝運の時代に集めたものもあり、正教蔵は舜興によって形成されたとしてよからう。舜興の収書の動機は、東における天台僧正の場合と同様で、山門の典籍焼失を補うものと想像される。正教蔵が観音寺から正教坊に移ったのは延宝頃とされる。上のごとき両寺の関係によるものであろう。

正教蔵の個々の典籍については、すでに多くの研究があり、全体像については、伊藤正義氏「文献調査とその資料性―西教寺・正教蔵本をめぐって―」(平成四年度国文学研究資料館講演集14国文学研究―資料と情報―)に詳細な紹介がある。当館では、昭和五六年から平成四年までの約二二〇〇点の調査結果に基づき、平成元年からマイクロフィルム撮影を行い、現在八三〇点約八万コマを収集している。

(文献資料部 樹下文隆)

—— 共同研究報告 ——

室町時代における

万葉集研究

小川 靖 彦

当共同研究は、岩下武彦（東京女子大学、研究代表者）、千艘秋男（東洋大学）、江富範子（京都女子大学）、石神秀美（鶴見大学）、深沢眞二（和光大学）、杉田昌彦（東京大学大学院人文科学研究所）、小川靖彦（当館助手）の七名で構成された。

当共同研究は、鎌倉時代の仙覚、江戸時代の契沖の万葉集研究の間において、必ずしも充分に光の当てられていなかった、三条西実隆・宗祇らによる、室町時代の万葉集研究を、万葉集研究者と中・近世文学研究者の協力により、この時代の和歌・連歌・歌学・古典研究の全体状況を視野に入れつつ検討し直すことを最終的な目的とするものであるが、共同研究期間内においては、当館に所蔵される三条西実隆自筆の万葉部類書「一葉抄」（巻二、巻三前半からなる残闕本）の翻刻・校訂及びその万葉集の訓読の検討等の基礎的研究を当面の

課題とした。

共同研究期間内に七回の研究会を開くとともに、「一葉抄」の諸本（京都大学図書館本・お茶の水図書館本等）の集中的な調査を行った。

当共同研究の成果としては以下の諸点が挙げられる。第一に、当館所蔵の三条西実隆自筆本「一葉抄」については、書誌・本文の調査を一応終え、翻刻をほぼ完成させた。「一葉抄」の翻刻・校訂は、既に宮内庁書陵部本を底本とする渋谷虎雄氏の業績があるが（「中世万葉集研究」所収、但し自筆本については写真版による調査）、当共同研究の複数の眼による原本調査に基づく翻刻は渋谷氏の研究を多少なりとも前進させることができたかと思われる。また、自筆本の補修が緊急に必要であることも確認した。第二に、諸本の自筆本相当箇所の調査を通じて、諸本中、京都大学図書館本が重要な伝本であることが判明した（但し、自筆本と京都大学図書館本の間には最低一本の介在が考えられる）。また、お茶の水図書館本について

も二種類の本からなる合冊であるという特異な成り立ちが明らかになった。京都大学図書館本・お茶の水図書館本については自筆本相当箇所の調査が一通り終わり、現在翻刻中である。静嘉堂文庫本についても書誌的調査を行った。第三に、「一葉抄」の万葉集訓読と万葉集諸本の訓読の対照を部分的に試み、「一葉抄」をはじめとする室町時代の万葉集訓読の実態を明らかにする必要性を確認した。

将来的には「軍記物語伝本書目」（仮称）とでも言うべき、現存諸伝本を一覧できる集大成の作成をめざして、まずは、「太平記」・「保元物語」・「平治物語」について、国文学研究資料館所蔵のマイクログラフ資料・和古書を調査することを目的とした。

軍記物語の

伝本についての研究

佐伯 真一

中世の軍記物語諸作品は、各々が複雑な系統に分かれる諸本を有することで知られている。従来の研究の中で、その分類・系統化が進められてきたが、なお、版本を含む伝本個々に即した研究は十分に公開されているとは言えない。本研究は、そうした状況を打破し、

今後、前記のような上記三作品の伝本一覧の刊行を目標として、人員の規模を拡大し、科学研究費

等によって、より大きな企画として継続してゆきたい。個々の写本や版本の刊行別の特徴を明記し、冒頭部や奥書・刊記部分などの見本写真なども備えて、机上の作品研究にも、また訪書旅行などにも役立つような伝本一覽を完成させることが、参加者全員の念願である。

守覚法親王の儀礼と 学問・芸術に関する研究

山崎 誠

中世寺院に於ける儀礼研究の重要性は、最近各分野で認識され始めている。文学の分野に於いては、和漢の文芸作品の製作・利用・享受がなされる場としての仏事法会、その唱導の場が注目される。本研究は古代から中世への転換期に國家仏教の頂点にあって重要な役割を果たした仁和寺守覚法親王の編纂になる、膨大な仏事法会の記録である仁和寺藏紺表紙小双紙〔仁和寺守覚法親王がつかさどり関与した宗教儀礼の実態を具体的に知るこののできる貴重な資料である。従って後白河時代の願文・表白を中心とした漢文学・声明・講式など仏教儀礼に結び付いた文芸の研

究に重要な手がかりを与えるとともに、広く唱導・芸能などの宗教に関わる中世初期文化を解明する上でも極めて重要な資料でもある。また美術史・建築史・芸能史・寺院構造史など他領域の學術研究に於いても、研究の空白を埋め得る極めて有益な資料となるであろうを多角的視野から研究することを目的として計画された。

本資料については数年前より、私的研究会に於いて解説作業を継続しており、本共同研究はその上、研究成果公開へ向けての実作業を中心とした共同研究となった。

具体的には守覚法親王の監修になる、院政期宗教文化の集大成であるこの紺表紙小双紙の写本全三百余冊を整理復元して、正確な校勘を行ない翻刻し、詳細な解題を加えた資料集として刊行することを目指した。そのために、共同研究では数回に亘る検討会を開いた上で、守覚法親王の関わった具体的な仏事法会の各次第のまとめに、その機能や意図について、年代推定を含めて詳しい解題を分担執筆した。会場の差図についても復元を図り、これを加えることとした。また、紺表紙小双紙を解

読するための法会の様式・堂荘嚴・法具、ならびに声明・唱導に関する要語の解説にあたった。また固有名詞の詳細な索引を付けることとした。かくして計画通り、一応平成六年度内に出版の手筈がとれた。

当館所蔵の各地寺院典籍の文献情報を利用照合しながら、法親王が担った院政期宗教文化年表を作成することは、時間の制約もあり計画を実行するに至らなかった。また、当初計画した論文集についても、べつの機会に改めて検討することとした。

情報処理システムの 和歌文学への応用に 関する研究

北村 啓子

真に研究者の利用に耐える検索システムを目指して、和歌文学を対象に歌語の検索や校本作成に利用できる検索ツールのあり方の検討と開発に取り組み、データの格納方法と検索機能の両方からアプローチを行った。

「堀河百首」は、和歌文学史上新風胎頭の時期とされる康和・長治期に詠進された最初の応制百首

であり、今後の院政期及び中世の和歌文学研究に資するところが大きいと考え選定した。底本として、当館所蔵の版本群書類従本（三條實憲氏旧蔵本）を使った。

研究に耐えるものにするために、底本に忠実に翻字した本文を電子コード化した。さらに検索を意識し、歴史的仮名遣い、古文法、送り仮名、用字法、異体字の統一などを考慮し翻刻を施した校訂本文の二種類を用意した。これにより、底本文を直接検索することと、校訂本文を検索し底本文にあたるのが可能となる。

また、「堀河百首」の特徴である和歌配列の規則性を活かし、部立・歌題・歌人名をすべての和歌にデータとして入力することなくプログラムで個々の和歌に付与して編集する方式にした。

さらに、国文学らしい検索の機能として、係り結び関係の検索、活用語の活用形も含んだ検索、異表記辞書を使った検索等のプログラムを開発した。さらに、底本文と校訂本文を比較することにより自動的に異表記を辞書化する試みも行った。

最後に、本文の翻字・翻刻に際

し、またそれらの電子コード化に際しての凡例作成に取り組んだ。今まで多くの方が電子コードテキストを作成する際に遭遇したと思われる種々の問題が山積しており、凡例として明文化することは困難を伴った。今後同じ道を歩む方の指針となることを期待している。

以上の検索システムの開発にあたっては、利用環境の汎用性を重視し、データはMS-DOSテキスト形式とし、検索システムは個々の機能ごとのツールの集まりとして実現した。これにより、特定のアプリケーションシステムに束縛されることなく、研究者が自由にツールを組合せて利用することができる。また、研究者自身による改造や新しいツールの開発も手軽に行えるようツールは「perl」(文字列処理機能の強力なフリーソフトウェア)で記述した。

研究分担は、新井栄蔵(当館教授)のご指導のもと、戸谷精三(長野工業高等専門学校助教授)服部一枝(日本橋女学館高校教諭)が翻字・翻刻を担当、半田志郎(長野工業高等専門学校助教授)北村啓子(当館助手)が本文のデータ入力、処理プログラムの開発に

当った。

本研究は来年度も継続の予定であり、主として異本間の比較に取り組む計画である。

寛永期版本の序跋

新藤 協三

文学書が出版物の形で広く世に流布するようになるのは近世に入ってからで、慶長期以降元和・寛永期には、仏書・漢籍・医学書・辞書などと共に、多くの文学書が刊行された。本研究は、この近世期に刊行された出版物の序跋・刊語を集めて分析することによって、古典文学の複製や新作出版の際に、どのような人物が如何に関わっているかを具体的かつ総合的に把握してもらう近世初期出版文学生成の過程を説明しようとするものである。表題の「寛永期版本」は、寛永期迄の版本の意である。

実施に当たっては、先ず国文学研究資料館収集のマイクロフィルムの中から、慶長・元和・寛永期に刊行された作品を抽出し、余裕があれば共同研究者所蔵の原本(及びその複製物)や、館の相互利用サービスによって得られる紙

焼写真類にまで対象を拡げることにした。

調査の方法は、独自のカードを作成し、共同研究者が分担して序跋と刊語を集め、討議を重ねつつ対象とする人物を定め、当時の日記など周辺の資料を用いながら、寛永期迄の出版の担い手の実体に迫ることとした。その第一段階として、とり敢えず当館に収まるマイクロフィルムの中で、慶長から寛永にかけて出版された文学書のうち、刊記を有する作品二七〇点を調査することから始めた。日時を決めて集まり、各自の調査をもとに報告や討議を行なったのは次の四回である。平成五年八月十二日(木)、九月十三日(月)、十一月一日(月)、平成六年一月十日(月)。外に平均三回程度、各自が個々に調査を行なった。

結果的には、序跋を有する版本が意外に少なかったため、所期の目標に迫るほどの成果は遂げられなかったが、無刊記本の中から該当する版本を抽出するなど対象を拡大することで、この方法論は有効であろうとの見通しには達した。

日本文学の特質

— 中世小説にあらわれる

女性と神仏信仰—

武井 協三

平成五年度の当館外国人研究員として、コロンビア大学からバーバラ・ルーシユ教授をむかえた。

ルーシユ教授を中心とする共同研究は当館において計三回開催された。第一回はルーシユ教授から、熊野比丘尼、血盆経、無外如大禅尼など、今回来日の課題が話され、とくに日本全国の尼寺に所蔵されている資料調査の必要性が指摘された。第二回、第三回は石川力山氏、今井雅晴氏、徳田和夫氏、真鍋俊照氏から、ルーシユ教授の問題提起を受けた、それぞれ興味深い発表を聞くことができた。

この他、共同研究参加者に関西の研究者若干名を加えたメンバーによって、関連する見学会が金沢文庫、京都東福寺において行なわれた。

これらによって、ルーシユ教授が、今後の尼寺調査の人脈の基盤を得られたこと、また副産物として京都の某尼寺から「千代のさうし」が発見されたことなどが、大きな成果であったと言える。

彙報

委員会日誌
平成5年

11月5日

国文学文献資料調査
員会議(中部地区)

11月11日

国際日本文学研究
会委員会(第二回)

11月26日

国文学文献資料調査
員会議(九州地区)

12月7日

共同研究委員会(第
二回)

12月24日

国際日本文学研究
会委員会(第三回)

平成6年

1月27日

大学院教育協力委員
会(第一回)

2月8日

共同研究委員会(第
三回)

2月10日

国文学文献資料収集
計画委員会(第二回)

2月25日

情報処理システム運
用委員会(第一回)

3月1日

古籍籍総合目録委員
会(第一回)

評議員会の開催について

本年度第二回評議員会が平成六
年三月十七日(木)に開催され、

議事は、管理運営の概況、平成6
年度予算内示及び科学研究費補助
金並びに平成6年度事業計画につ
いて評議が行われた。

運営協議員会の開催について

本年度第二回運営協議員会が平
成五年十月六日(水)に開催され、
議事は、教官人事について協議が
行われた。

本年度第三回運営協議員会が平
成六年三月八日(火)に開催され、
議事は、教官人事、管理運営の概
況、平成6年度予算内示及び科学
研究費補助金並びに平成6年度事
業計画について協議が行われた。

外国出張

安永 尚志
渡 航先

連合王国・フランス
共和国・ドイツ連邦
共和国

目的
外国における日本語

データベースの提供
方式及び処理方式に
関する調査研究、国
際学術研究の事前打

合せのため

期 間 平成6年3月19日
平成6年4月8日

人事異動(平成5年9月~平成6
年2月)
○平成5年10月1日付

(採用)

文部省永年勤続者表彰

文部省永年勤続者表彰規程に基
づき、次の方に表彰状を伝達し、

記念品として銀杯を贈呈した。

○平成5年11月23日付

三上 智(管理部会計課長)

野村 龍(会計課情報処理係)

(併任)

今西裕一郎(文献資料部助教授)

(九州大学助教授から)

(平成5年10月1日~平成6年3
月31日)



国文学研究資料館全景

新収資料紹介(37)

古今軍鑑

本書は、江戸版の仮名草子である。書誌は次のとおり。大本四巻四冊。【表紙】紺色改装表紙。縦二七糎、横一八・六糎。【本文】匡郭四周単辺。縦二一・七糎、横一六・七糎。半丁十四行。【丁数】一之巻二三丁(目録丁は一丁の表の半丁分。一四之巻迄全て同様)。二之巻十六丁(目録丁半丁)。三之巻十三丁(目録丁半丁)。四之巻十五丁(目録丁半丁。十五丁めの裏は欠損)。

【挿絵】一之巻(三才、五才、七才、九才、十二才、十五才、十八才、二十才、二二才)二之巻(三才、五才、七才、九才、十一才、十三才、十五才)三之巻(三才、四才、五才、七才、十才、十二才)四之巻(三才、五才、七才、九才、十一才、十二才、十四才)。すべて片面で合計二九図。

【題簽】後補無辺左肩「古今軍鑑一(一四)」(墨書)。なお国会図書館本の原題簽は目録題とはほぼ同じ字様で「古今軍鑑」とする。

【目録題】「古今軍鑑卷之一(一四)目録」。「板心」上部に「士一(一四)」下部に丁数。【刊記】「寛文十庚戌歳玄月吉旦／通油町／

本問屋」。

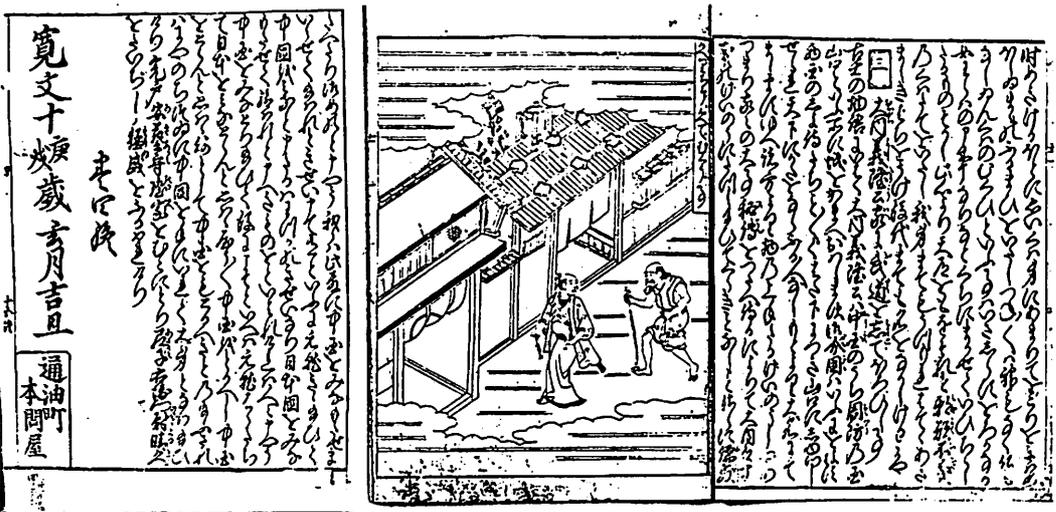
さて、仮名草子の軍記といえ、
 「信長記」・「大坂物語」・「太閤記」といった元和・寛永期に刊行された、わりと早い時代の作品が想起される。しかし、それらとても古活字版や古い寛永整版本で終わつたわけではない。例えば、「太閤記」は寛文二年、「信長記」は寛文十二年、「大坂物語」にいたっては寛文八・十一・十二年の版がある(渡辺守邦氏「大坂物語」の諸版「実践女子大学文学部紀要」32を参照)。さらに、「古老軍物語」(万治四刊)、「武者物語之抄」(寛文九刊)等も刊行され、寛文期にあつてもいまだ仮名草子の軍記は健在であつた。

「古今軍鑑」は、先にも記したごとく寛文十年の刊行であるが、刊年を有するのは、現在のところ本書のみである。版面も刷りむらのない安定した墨色である。ただ惜しむらくは、原表紙および原題簽を欠き、各丁の下部に少々の手づれがある。

各条の語り出し文句は、「古老軍物語」の「古老の物語にはく」
 「武者物語之抄」の「古き侍の物語に曰」と同様、すべて統一されている。本書の場合「古士の物語にはく」である。柱刻の「士」の字も、各条の語り出し文句に由来するものか。

内容は、題名の示すごとく戦にまつわる諸説話であるが、武功譚や立身出世にまつわる話だけを収載したのではない。むしろ、失敗者や非業の死をとげた者の話を以て、戦のみならず日常生活にも通じる教訓を説こうとする性格が見受けられる。

文献資料部
 和田 恭幸



寛文十
 庚戌
 歳
 玄月
 吉旦

通油町
 本問屋

新収和古書抄

— 平成五年 —

さころも 下巻一冊

室町物語。寛永頃の丹緑本。上巻を欠き、下巻のみ存。大本。全二十一丁。絵は片面六図で、いずれも丹緑筆彩あり。

源平盛衰記 四十八巻四十九冊

延宝八年版。寛文五年版と同版の絵入り平仮名本で、目録以外の四十八冊に、各々、最少で十六図、最多で四十図もの絵を有する(全て一丁の裏表を用いた片面図)。

源平盛衰記及び平家物語の諸版本の中でも最も絵の豊富な版である。

拾遺愚草(中巻) 写本一冊

江戸前期写か。鳥子袋綴。韻歌百廿八首から寛喜元年女御入内御屏風歌までを収めた藤原定家の家集「拾遺愚草」中巻のみの零本。

巻頭目録一行目に「拾遺愚草 丙」とある。題簽下部を欠くので、何冊本だったかは不明。識語・奥書の類はない。「楽軒珍製」「草韻書聞是吾家」の印記がある。

九代抄 写本一冊

後撰集から統後撰集までの九代の勅撰集から一五〇〇首を選んだ肖撰の秀歌選。題簽・内題・奥書・蔵書印の類は一切ないが、帙

外題に「伝岩山道堅筆 足利末期古写本」とある。

名所三百首鈔 刊本一冊

後代の名所題詠の規範となった順徳天皇主催の建保三年内裏名所百首の十二名の作者中から、順徳院・定家・家隆の三人の百首からなる建保名所三百首に、紹巴、昌

叱が注をつけた「建保名所三百首抄」の刊本。摺りのよい美本。「于時天和三癸亥歳中夏片山三右衛門開板」の刊記がある。

和歌色葉 写一冊
室町写。二三・一×一九・一種。楮紙袋綴(七穴)。墨付八丁。一面八丁一行。上巻のみの端本

で、「文安四年八月上旬吉日 藤原高俊(花押)」の書写奥書がある。古鈔本の中では京大本・関大本と最も近い性格を示しているかの如くである。

長秋詠藻 写一帖
近世初期写。二三・三×一六・六種。斐紙列帖装。表紙は斐紙、

金泥で山水・植物・雲霞文様を描く。見返し藍雲型。五括り三三紙

で、墨付六四丁。一面一〇行、一首一行書き。歌集原型と右大臣家

百首の間に寛喜元年の定家識語。巻末に「先師黄門為相 世公奥書」とする識語あり。本文の性質は冷

泉家本に拠った第二類第一種本の性質をほぼ示すが、右大臣家百首は第二種への移行の傾向をうかがわせている。

詞花和歌集 写一帖

近世中期写。二五×一八・二種。斐紙列帖装。紺無地表紙。見返し銀箔を撤く。墨付八三丁。一面一行、一首一行書き。奥書は無く、

裏見返しに「芳川柳塘蔵」と墨書。精撰本系統だが、賀部に初度本からの移行の痕跡の二首の他に良運

歌一首が混入している。
平戸藩謡史料 江戸末写九冊

九州平戸松浦藩の能楽資料。藩内で演じる囃子の曲を定めたもの。中の数点は「御楽舞方」等の印があり、松浦史料博物館本と正本副

本の関係にあると思われる。各冊の内容は以下の通り。「嘉公校定」(二点)・「嘉七追加」・「平戸囃子組明細書大成」・「平戸六拾番小謡上」(二点)・「平戸六拾番小謡下」(二点)。

うけらがはな第二編巻一 一冊

加藤千蔭の歌文集統編の撰者一柳千古(千蔭弟子)自筆稿本。巻

一(春夏歌)のみ。短冊状紙片を台紙に貼り並べ、歌集編纂の方法を伺わせる。散見される藍筆は文化五年刊本に反映されている。

古俳諧短冊貼交屏風 六曲一雙

宗因(西翁・梅翁)、未得、卜養、立圃、調和、湖春、可全、蝶々子、昌陸、昌純など、貞門・談林及びその周辺の俳人・連歌師達の

短冊一〇六枚(古筆極札を付すものあり)を貼り交ぜにしたもの。
蕙齋北尾政美画本コレクション

十一丁十五冊。北尾政美の絵入版本を集める。内容は、絵本孝経上下、百人一首、蕙齋画初二編(合羽刷)、蕙齋略画式(彩色)、

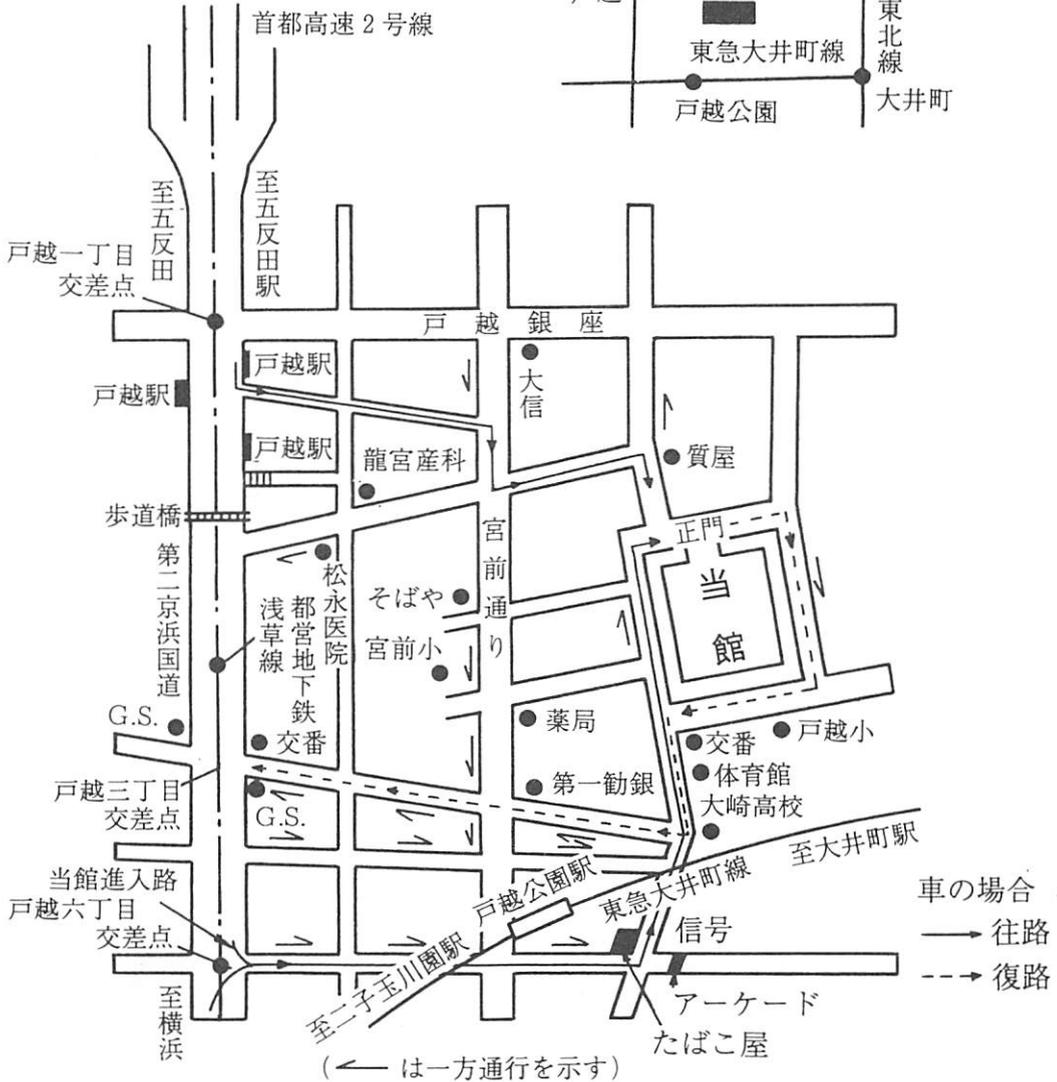
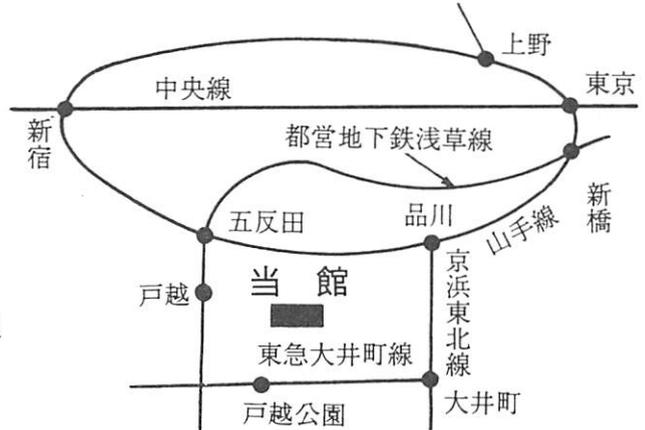
蕙齋画譜(彩色)、諺画苑(彩色)、人物草花魚貝略画(彩色)、鳥獸略画式(彩色)、諸職画鏡鑑、山水略画式(彩色)、心機一仏上中下。

小笹喜三蒐集印譜

長らく陽明文庫主事を勤められた小笹喜三氏は書誌学者としても知られているが、同氏が永年にわたって蒐められた印譜が数千点、一括して購入された。整理済みのもの、未整理のもの、研究メモ等区々であるが、時間をかけて整理をつける予定である。

案内図

■住所 〒142
 東京都品川区豊町1-16-10
 ■電話番号 03-3785-7131
 ■FAX番号 03-3785-7051



利用者へのお知らせ

◆岩国徴古館のサービス区分変更について

これまで岩国徴古館（文庫番号49）のマイクロ資料のサービス区分は、「C」（文献複写の際事前許可が必要）でしたが、格別の配慮により「B」（紙焼写真・電子複写可）に変更になりました。

なお、これに該当する岩国徴古館の資料は「マイクロ資料目録一九七八年」（第2冊）および「同一九九一年」（第15冊）に収録されています。

◆所蔵目録刊行のご案内

このたび「マイクロ資料目録」および「逐次刊行物目録」の最新版を刊行しましたのご案内します。

(一)「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九九三年」（第17冊）
この目録には、二六所蔵者（文庫）分、七、六四一点が収録されています。そのうち七所蔵者（文庫）が、今回新たに収録されたものです。

収録所蔵者（文庫）は、次のと

おりです。（*印は新規収録分）

- 文庫No. 所蔵者
- 20 宮内庁書陵部
- 25 東京都立中央図書館
- 26 酒田市立光丘文庫
- 33 東洋文庫
- 48 名古屋市蓬左文庫
- 55 陽明文庫
- 89 名古屋市鶴舞中央図書館
- 96 八戸市立図書館
- 99 高知県立図書館（山内文庫）
- 214 西尾市立図書館（岩瀬文庫）
- 224 熊本大学附属図書館（北岡文庫）
- 225 University of California, Berkeley
- 244 大阪女子大学附属図書館
- 257 大和文華館
- 272 弘前市立図書館
- 274 金沢市立図書館（稼堂文庫）
- 298 茨城県立歴史館
- 301 *広島市立中央図書館（浅野文庫）
- 303 *金沢市立図書館（藤本文庫）
- 307 *大倉精神文化研究所
- 311 *熊本大学教育学部
- 317 *福島県立図書館
- 318 夢望庵文庫

323 *秋田県立秋田図書館

コ1 後藤重郎
ナ4 *永井義慈

(二)「国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録一九九四年」

既刊の一九九二年版（第15版）に続いて、一九九三年一月まで収集した逐次刊行物の累積目録で収録誌数は三、六七二誌です。

◆オンライン利用者目録（OPAC）の利用について

明治以降に出版された活字本および影印本の目録は、現在、カード目録とオンライン利用者目録（OPAC）の併用となっています。したがって、検索の際、ご不便をおかけしていますが、順次カード目録のデータをコンピュータに入力していきますので、将来的にはOPAC端末で、すべて検索できるようにになります。ご理解、ご協力をお願いします。

◆新規に指定された貴重書のご紹介

当館所蔵資料のうち、特に資料的価値が高いと認められるものを

選んで、貴重書に指定しています。このたび、次の三点が新たに貴重書に指定されました。これによって、当館の貴重書は計八〇点になりました。

- ・「秋篠月清集」（写・一冊）
- ・「万葉見安・万葉集註釈」（写・六冊）
- ・「山本家古筆古版資料」

なお、貴重書の閲覧には、事前に「貴重書等閲覧許可願」（要押印）を提出していただきます。また、これらの原本保存のため紙焼写真本を順次作成していますのでご利用ください。

◆マイクロ資料目録の市販について

「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九九二年（縮刷版）」（第16冊）が笠間書院より刊行され市販されています（定価六、五〇〇円）。当館で発行している分は、部数に限りがあり、一部の機関にしか配布できないのが現状です。この縮刷版をご利用ください。

平成6年度

春季学会

①事務局 ②学会開催日 ③会場

解釈学会 ①〒101千代田区神田神保町2-46 教育出版センター内03-5394-1203 ②8月26日 ③国文学研究資料館

歌舞伎学会 ①〒169新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学演劇博物館内03-3203-4141内71-5218 ②7月31日 ③江戸東京博物館

訓点語学会 ①〒192-03八王子市東中野742-1 中央大学文学部国文学研究室内0426-74-3789 ②6月3日 ③東京大学山上会館

芸能史研究会 ①〒606京都市左京区浄土寺真如町77 紫雲荘6号室075-781-8718 ②6月12日 ③京大大会館

国語学会 ①〒113文京区本郷7-3-1 東京大学文学部国語研究室内03-3812-2111 ②6月4・5日 ③東京大学

古事記学会 ①〒150渋谷区東4-10-28 國學院大學文学部日本文学第2研究室 ②6月18~20日 ③就実女子大学

上代文学会 ①〒102千代田区紀尾井町7-1 上智大学文学部国文学研究室内03-3238-3637 ②5月21~23日 ③徳島文理大学香川校

昭和文学会 ①〒101千代田区猿楽町2-2-5 笠間書院内03-3295-

1331 ②6月4日 ③國學院大學 説話・伝承学会 ①〒602京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学国文学研究室内075-251-3421 ②5月1~3日 ③高野山大学

説話文学会 ①〒228相模原市文京2-1-1 相模女子大学学芸学部国文学科0427-42-1411 ②6月25・26日 ③相模女子大学

全国大学国語国文学会 ①〒101千代田区猿楽町2-2-6畑山ビル (株)おうふう ①03-3294-0857 ②6月11・12日 ③二松学舎大学

中古文学会 ①〒156世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部国文学研究室内03-3329-1151 ②5月28・29日 ③白百合女子大学

中世文学会 ①〒154世田谷区駒沢1-23-1 駒澤大学文学部国文学研究室内03-3418-9240 ②5月21~23日 ③法政大学

日本演劇学会 ①〒169新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学演劇博物館内03-3203-4141内71-5218 ②5月28・29日 ③慶応義塾大学

日本音声学会 ①〒101千代田区猿楽町1-3-1 03-3292-1718 ②9月24・25日 ③同志社大学

日本近世文学会 ①〒171豊島区目白1-5-1 学習院大学日本語日本文学科諏訪春雄研究室内03-3986-0221内5766 ②5月28~30日 ③山形大学

日本近代文学会 ①〒113文京区本郷7-3-1 東京大学文学部国文学研究室内 03-3812-2111内3818 事務取扱①〒113文京区本駒込5-16-9 学会センタービル日本学会事務センター内03-5814-5810 ②5月21・22日 ③東京大学

日本口承文藝學會 ①〒192-03八王子市南大沢1-1 東京都立大学中国文学研究室内0426-77-2145 ②6月4・5日 ③金沢工業大学

日本国語教育学会 ①〒112文京区大塚3-29-1 日本教育研究連合会第3研究室内03-3941-3420 ②8月6・7日 ③6日筑波大学附小・中・7日国立教育会館

社団法人 日本語教育学会 ①〒107港区赤坂1-8-10第9興和ビル内03-

-3584-4872~3 ②5月28・29日

③早稲田大学 日本児童文学学会 ①〒263千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学教育学部国語科 佐藤宗子研究室 ①043-290-2538 ②11月12~14日 ③大阪国際児童文学館

日本社会文学会 ①〒101千代田区三崎町2-3-1 日本大学法学部寒河江・栗栖研究室03-5275-8764 ②6月11~12日 ③早稲田大学

日本文学協会 ①〒170豊島区南大塚2-17-10 03-3941-2740 ②7月3日 ③神戸大学発達科学部

日本文学風土学会 ①〒214川崎市多摩区東三田2-1-1 専修大学文学部国文学科内044-911-1036 ②6月18・19日 ③専修大学

日本文芸研究会 ①〒980仙台市青葉区川内 東北大学文学部国文学研究室内022-222-1800内2503 ②6月11・12日 ③東北大学

日本文体論学会 ①〒110台東区下谷1-5-34 三修社内03-3842-1711 ②6月18・19日 ③桜美林短期大学

日本方言研究会 ①〒192-03八王子市南大沢1-1 東京都立大学国語研究室内 日本方言研究会幹事0426-77-2135 ①〒115北区西ヶ丘3-9-14 国立国語研究所 ①03-3111 ②6月3日 ③東京外国語大学

俳文学会 ①〒192-03八王子市大塚359 帝京大学文学部森川昭研究室内0426-76-8211

仏教文学会 ①〒654神戸市須磨区東須磨青山2-1 神戸女子大学D館301号 石原研究室内078-731-4416 ①〒141品川区大崎4-2-16 立正大学文学部 今成研究室内 03-5487-3292 ②6月4~6日 ③大谷大学

美夫君志会 ①〒466名古屋市中区八事本町101-2 中京大学文学部国文学研究室内052-832-2151 ②7月23・24日 ③中京大学文学部

和漢比較文学会 ①〒657神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部合同研究室内 078-881-1212

印刷所 睦美マイクロ株式会社

郵便番号 一四二

東京都品川区豊町一―一六一〇

国文学研究資料館

編集・発行者

国文学研究資料館 第四十二号
平成六年三月発行